

日蓮は日本国うまレに生なてわわく（誑惑）せず、ぬすみせず、かたがたのとなし。末代の法師にはとがうすき身なれども、文ぶんをこのむ王ぶに武ぶのすてられ、いろ（色）をこのむ人に正直物のにくまるるがごとく、念仏と禪と真言と律とを信よずる代あヒに値あて法華経をひろむれば、王臣萬民にくまれて、結句けつくは山中に候へば、天あまいかんが計はからハせ給フらむ。五尺の（雪）ふりて本よりもかよわぬ山道やまみちふさがり、といくる人もなし。衣きぬもうすくてかん（寒）ふせぎがたし。食じきたへて命すでにをはりなんとす。かかるきざみ（刻）にいのちさまたげの御おんとぶらい、かつはよろこびかつはなげかし。一度にをきもい切きてうへし（餓死）なんとあん（案）じ切きて候ヒつるに、わづかのもしびにあぶら（油）を入レそへられたるがごとし。あわれ あわれ

たうとくめでたき御心おんこころかな。釈迦しやくか仏法華経ぶつぽうけ定メて御計おんはからヒ候ヒはんか。恐々謹言。

（弘安二年十二月二十七日）